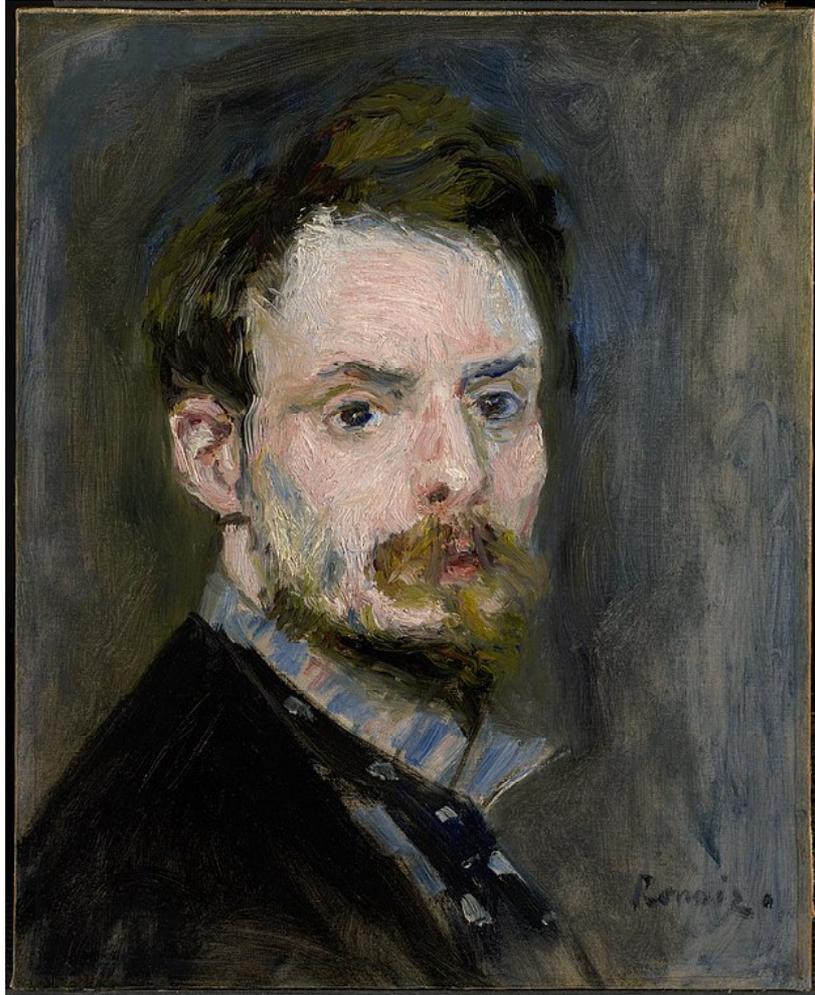


メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2018年11月21日 (Vol.150)

「ピエール＝オーギュスト・ルノワール、その絵画と俳句」

「ピエール＝オーギュスト・ルノワール、その絵画と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pierre-Auguste_Renoir_-_Autoportrait,_1875.jpg

「絵というものは、愛すべきもの、美しいものでなければならない」と言い、優しい色彩と穏やかで明るい空気感から日本人にも好まれ、印象派、ポスト印象派を代表するフランスの画家ピエール＝オーギュスト・ルノワール（1841-1919）。

モネが自然を愛し、風景画を中心に描きつづけたのに対し、花や風景画もありますが、ルノワールは人を愛し、人物画をメインに描きつづけました。

「季語に遊ぶ」では、前々回より西洋美術と俳句の組み合わせを試みています。

第3回の今回は『ラ・グルヌイエール』『ムーラン・ド・ラ・ギャレット』『ぶらんこ』『裸婦』シリーズ、『浴女』シリーズなど、柔らかい色づかいによって生の歓びを描いたピエール＝オーギュスト・ルノワール。

そんな彼の作品を制作時期順に掲載し、その作品に合う俳句を選んでみました。

お楽しみ下さい。

作品の下に制作時期 | 作品詳細 | 所在を記載しています。

1. 『狩りをするディアナ』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pierre-Auguste_Renoir_020.jpg

1867年 | 油彩、キャンバス、199.5 × 129.5 cm | ナショナル・ギャラリー (ワシントンD.C.)

ルノワール 26歳の作品で、画家としての第一歩を記念する興味ある作品です。

狩猟の女神アルテミス、すなわちディアナがいま鹿を射ちとめて岩の上に腰をおろしているところ。

女神はあまり神らしくなく、豊満に肥えた若い女として描かれています。この肉体の充満した量感は、19世紀半ば以後に実ってきた写実的な描き方をルノワールも勉強し、そこから歩み出しているところを示しています。

背景の木立ちや空の感じは先輩のコローの自然描写に近く、こういう手堅い描写の技術をしっかり取り入れて、次第に独自の方向に向かって行きますが、もっとも初期の作品として忘れられない力作です。

武士の子の眠さも堪へる照射かな（堪へる＝たへる）（照射＝ともし） 炭太祇（たん たいぎ）（1709-1771）

<季語> 照射で三夏

昔、夏に行われていた鹿狩り方法。

鹿は尾根から尾根へ移動する習性があります。

鹿の眼は光に特に反射したことから、暗夜、鹿の通り道に火串（ほぐし）と呼ばれるかがり火を焚いて、通過する鹿の眼がその光にくらんだ一瞬を狙って猟師が矢を放って射止めていました。

江戸時代くらいでほとんど行われなくなりましたが、古式の狩りの情景として想像をかきたてられるもので、例句がことのほか多く残されています。

2. 『ポン・ヌフ』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Auguste_Renoir_-_Pont_Neuf,_Paris_-_Google_Art_Project.jpg
1872年 | 油彩、キャンパス、75.3 × 93.7 cm | ナショナル・ギャラリー (ワシントンD.C.)

セーヌ川に架かるパリ最古の橋として知られるポン・ヌフ橋。

橋の上には数台の馬車をはじめ、紳士や日傘を差す淑女、子供たち、兵士など多様な人々が行き交う様子が生き生きと描かれていて、当時のパリの活気を感じさせてくれます。

道路は日差しによって輝き、空よりも明るいくらいで、日陰の部分は涼しげな青で、印象派の特徴である光の効果を表現しています。

ルノワールはこの絵を制作するにあたり、ポン・ヌフ橋の近くのカフェの上の階の部屋を借り切り、弟のエドモンは兄のデッサンのために、行き交う人々にゆっくりと歩いてもらうように頼んだそうです。

日本橋や曙の富士初松魚

正岡子規(まさおか しき) (1867-1902)

<季語>初松魚(はつがつお)で初夏

黒潮の流れに沿って北上してくる鰹は、3月頃四国の沖に、4月には紀州沖に、そして若葉の頃、相模灘沖にさしかかり、その頃が脂がのり一番美味とされています。

初鰹は江戸庶民に珍重され、初物を食えば七十五日長生きできるというて競って求めました。

また、日本橋は日本の道路網の始点となっていて、初代の橋は徳川家康によって架けられました。

3. 『編物をする娘』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pierre-Auguste_Renoir_-_Girl_crocheting.jpg

1875年 | 油彩、キャンバス、73.5 × 60.3 cm | クラーク美術館

斜め横を向いた娘の像ですが、この作品の特徴は、たっぷりと光を浴びて、その光によって豊かな娘の美しさを浮き立たせているところにあります。

印象派画家の多くは、光を浴びる自然の情景を追究し、これを描くことに専心しました。

ルノワールも同じく自然を描くことも怠りませんでした。いつからとはなく彼は人物に帰り、ことに女性を描くことが多くなります。そして女性を印象派風の外光描写によって明るく、鮮麗に描く、ルノワールによって印象派は人物にもその特質を生かすことになりました。

髪が長く後ろにたれていますが、この髪が光を浴びて輝き、片頬（かたほほ）から肩や腕に光が流れています。

その光と影の対比の中に、娘の柔らかな触感がよく表わされています。

毛糸編むかそけき音をくり返し

稲垣きくの(いながき きくの) (1906-1987)

<季語> 毛糸編むで三冬

セーターや手袋、マフラーなど防寒用の衣類を毛糸で編むこと。一時期はやった機械編みともども、毛糸を編む光景は少なくなりましたが、それでも赤ん坊や恋人、親しい人のため、待合室や公園のベンチなどでひたすら編み棒を動かしている女性の姿にはほのぼのとした安らぎが感じられます。

4. 『ピアノを弾く婦人』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pierre-Auguste_Renoir_031.jpg

1875年 | 油彩、キャンバス、93 × 73.5 cm | シカゴ美術館

ルノワールはピアノを弾く場面は何枚となく描いています。

この作品は比較的早い時期のもので、印象派時代の中でも初期に属します。

若い婦人の白い衣装や顔や手の表現に印象主義的な技法が用いられています。

ピアノや背景の描き方は特に珍しいものではなく、あくまでも婦人の衣装が主題になっています。

ピアノは衣装と対比して、婦人と衣装の豪華さを引き立てるのに役立っています。

この作品においてもルノワールはまず婦人の装いの美しさという最も色彩として働くものを主題に選んでいます。

弾初の鍵より白き手をもてり（鍵＝キー）

日野草城（ひの そうじょう）（1901-1956）

<季語>弾初（ひきぞめ）で新年

もともとは邦楽の社会での慣わしで、新年に師匠のところに門弟たちが集まって琴や三味線を弾くことを指します。

現在ではピアノやヴァイオリン、チェロ、ギターなどを弾きはじめることが主流になりつつあります。新しい年を迎え、正月気分を奏でるものとして、すがすがしい季語です。

5. 『ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pierre-Auguste_Renoir,_Le_Moulin_de_la_Galette.jpg

1876年 | 油彩、キャンパス、131 × 175 cm | オルセー美術館

パリのにぎやかな街モンマルトルは、19世紀の半ば頃は昼といわず夜といわず集まって来る人々の歓声が絶えませんでした。

それは社交の場でもあったし、享楽の庭でもありました。

紳士淑女もぞくぞく来ましたが、詩人も音楽家も画家も作家たちも、つまりあらゆる種類の人々が集まって来ては酒を飲み、語り、酔うのでした。

なかでもムーラン・ド・ラ・ギャレットは最も繁盛した踊り場でした。

ルノワールはこの情景を描いてみたかったのです。

木立ちの下で明るく輝く光を浴びて踊る男女の群れは、赤、黄、青の色となって、あちこちに集まったり散ったりして、豊かな色の舞台となっています。

この色の対比を中心に、多くの男女の語らう顔を集合し、組み立てた構図です。

光の効果をねらって色の交響を主題としたところに、生粋の印象派の描風が見られます。

づかづかときて踊子にささやける

高野素十(たかの すじゅう) (1893-1976)

<季語> 踊子で初秋

俳句では、「踊」といえば「盆踊」、「踊子」といえば盆踊りの踊り子ですが、掲句は作者が海外で見た舞踏場の光景であったようです。

素十が外遊先で観た盆踊とは異質の文化である社交ダンスを詠んでいます。

6. 『ぶらんこ』



ルノワールの印象派時代の特色をよく表わした作品です。木の間から漏れてくる光によって、木立ちも小道も美しい色に反映していますが、とりわけそこに憩う人々の様子が、光の揺れただよう中でひととき鮮かな生気を帯びています。このように光の効果をとらえるのが印象派の特徴です。しかし、ここでもルノワールは他の画家と違って自然よりもむしろ人物を主題としています。光の効果も彼においては、女性や子供の上で生きています。

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Auguste_Renoir_-_The_Swing_-_Google_Art_Project.jpg

1876年 | 油彩、キャンパス、92 × 73 cm | オルセー美術館

ふらここや花を洩れ来るわらひ声

三宅嘯山(みやけ しょうざん) (1718-1801)

<季語>ふらここで三春

ふらここはぶらんこのこと。

ゆさわり、ふらここ、ぶらんこと時代とともに名前が変わってきました。

また、漢語では鞦韆(しゅうせん)と呼ばれます。

寒い間はあまりかえりみられませんが、暖かくなるにつれて、子供たちに親しまれます。

7. 『雨傘』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pierre-Auguste_Renoir,_The_Umbrellas,_ca._1881-86.jpg

1881～85年 | 油彩、キャンパス、180 × 115 cm | ナショナル・ギャラリー（ロンドン）

1880年頃からルノワールの制作手法は変ってゆきます。

これはイタリア旅行でボンベイの壁画を見た時の感動が原因とされています。

古代壁画のもつ鮮麗な色調が影響し、色種を減らしはじめ、そのうえルネサンスの作品からも形体をしっかりとつかむ事を察知して、従来の色調の融和を本領としてきた手法から移って、引きしめる方向をたどりはじめます。

これは新しい試みでしたが、ルノワールの制作体質に合わず、長続きしませんでした。

数年もたたないうちに、ルノワールはこのような手法から脱してゆきます。

1880年～85年あたりがその時期で、この作品も重なり合っている傘の前に立っている人物の描き方にも形式化された手法が多少見られます。

梅雨傘を挿してぞ宝塚へ行く（挿して＝さして）

後藤比奈夫(ごとう ひなお) (1917-) (現在 101 才)

<季語> 梅雨で仲夏

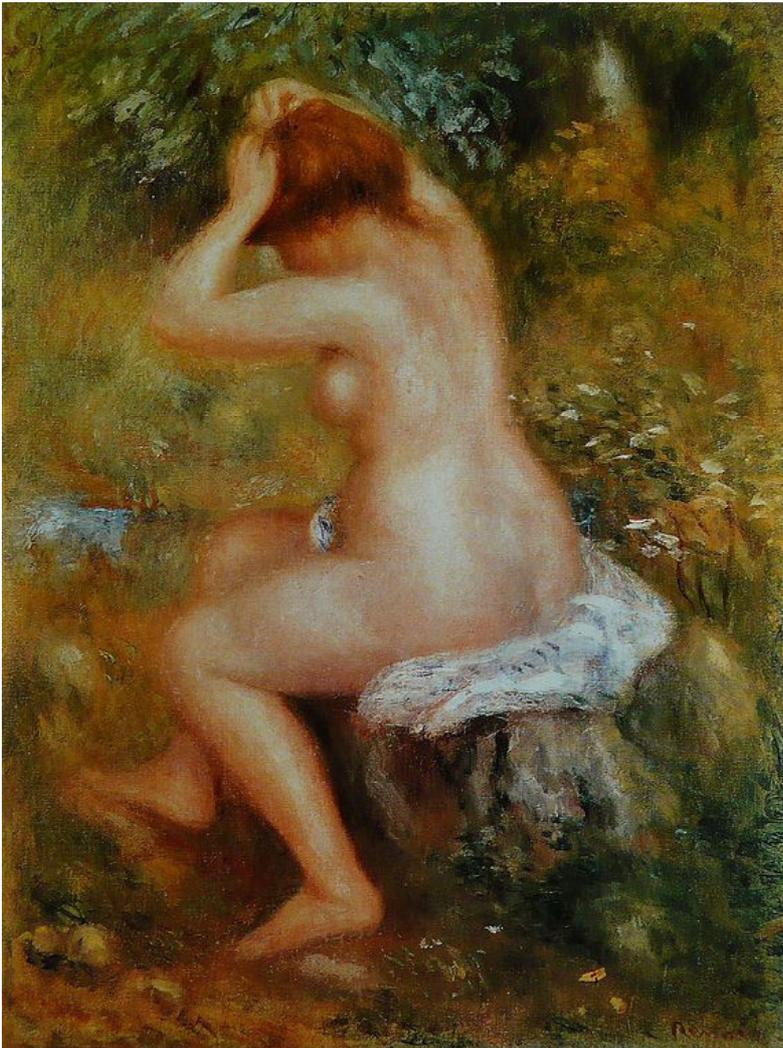
傘や雨傘のみでは季語になりません。

傘、雨傘の句を作る場合は別の季語と組み合わせます。

梅雨は暦の上では6月11日頃の入梅の日から約1ヶ月間の雨期をいい、揚子江流域と日本に特有の気象現象です。

梅の実が熟する頃なので「梅雨」とよび、黴(かび)の発生しやすい頃でもあるので「黴雨(ばいう)」とも書きます。

8. 『髪を梳く浴女』



ルノワールが 50 歳に近づく頃から、裸婦を描くことがいよいよ増えて、いろいろなポーズを自由に展開してゆきます。

ここでは後ろ向きに座って、いま水浴びして乱れた髪をなおしているところです。

この女性は背中からお尻がとりわけふくよかで、円熟した女性の魅力をとらえています。

この肉体を縁の濃い繁みの前に置いて、自然の清新な色調と女性の熱っぽい肉感を、線を用いずふんわりとした色調でのびやかに描き出しています。

それを包む自然とが微妙な色の関係を築くことによって一層効果をあげています。

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pierre-Auguste_Renoir_-_Baigneuse_se_coiffant.jpg

1885～90年 | 油彩、キャンパス、39.4 × 29.2 cm | ナショナル・ギャラリー (ロンドン)

肌ぬいで背をくねらせて髪洗ふ

石原八束(いしはら やつか) (1919-1998)

<季語> 髪洗ふ (かみあらう) で三夏

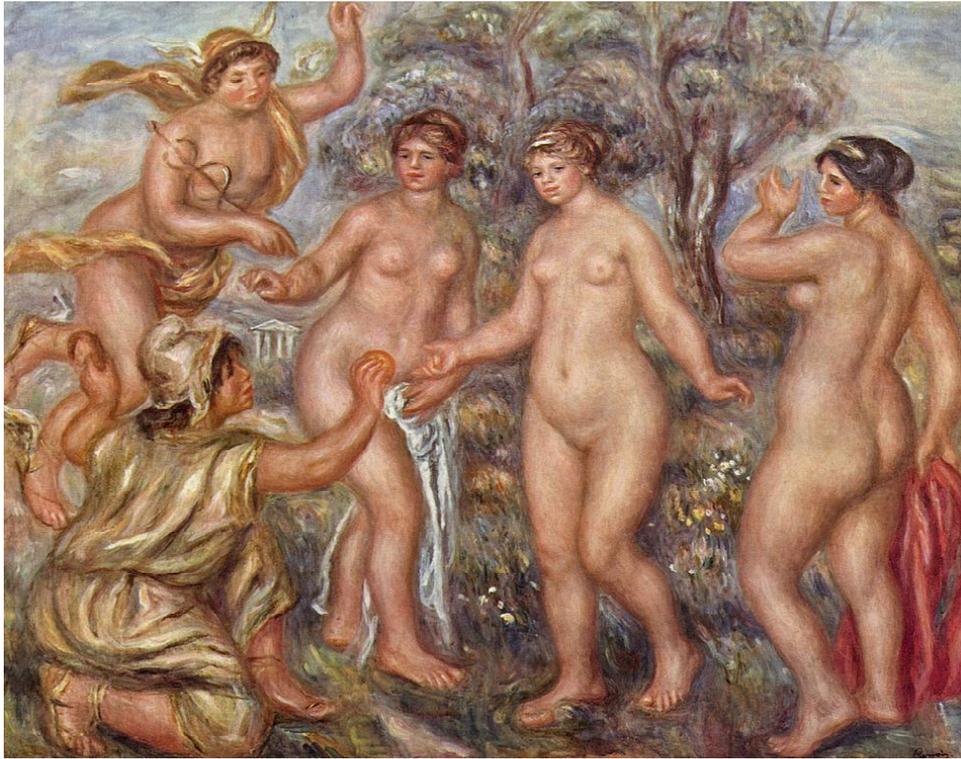
一年中、季節を問わず髪は洗われますが、夏は汗をかきやすく髪が汚れやすいので、他の季節に比べて洗うことが多くなります。

髪を洗うという行為には髪の汚れを取るだけでなく、多分に気分的なものが含まれます。

髪という身体の一部を洗うのに過ぎないのに、気持ちまですっきりします。

掲句は男性が写実の眼で女性が髪を洗う行為を捉えています。

9. 『パリスの審判』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pierre-Auguste_Renoir_150.jpg
1913～14年頃 | 油彩、キャンバス、73 × 92.5 cm | ひろしま美術館

パリスの審判とはギリシャ神話の挿話でトロイア戦争の発端とされる事件。ルノワールをはじめ、さまざまな画家が『パリスの審判』というタイトルの絵を描いています。「最も美しい女神に与えられる」といわれた黄金のリンゴをめぐるユノ、ヴィーナス、ミネルヴァの天界での三女神が争い、大神ゼウスがこの三女神の美の判定をトロイアの王子パリスに委ね、ヴィーナスが選ばれ、彼女に黄金のリンゴを渡す場面が描かれています。ここでも、ルノワールは神話を借りて三女神の美しい肉体を描くのが目的でした。他の裸婦を描いた作品では静止しているものがほとんどですが、この作品の特徴は静止しないで、ある動作をそれぞれとっている点です。中でも中央のヴィーナスは片足を前にして歩み出そうとしている動的なポーズの裸婦として珍しい作品です。なお、左上に描かれて黄金のリンゴを指差しているのは神々の使者メルクリウスです。

空は太初の青さ妻より林檎うく(太初=たいしょ、世界のはじめのこと)
中村草田男(なかむら くさたお) (1901-1983)

<季語> 林檎で晩秋

「林檎」には旧約聖書のアダムとイブが蛇にそそのかされて食べたリンゴ。息子の頭上のリンゴを射たウィリアム・テルの話。ニュートンが気づいた万有引力の木から落ちるリンゴ。グリム童話の「白雪姫」の毒リンゴなど、いろいろなイメージがあります。掲句は昭和 21 年に詠まれ、住む家さえなく、勤務先の学校の寮の一室を借りて住んでいたころのものです。窓から見える真っ青な空を背に、妻から受けとった林檎から、アダムとイブを連想し、すでに樂園を追放された身である人間は、愛する妻の差し出すものなら何でも食べるという、愛情表現です。

10. 『ラ・グルヌイエール』

モネの『ラ・グルヌイエール』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_La_Grenouill%C3%A9re.jpg

1869年 | 油彩、キャンバス、255 × 205 cm | オルセー美術館

今回取りあげる最後の作品です。

年代は1869年に遡りますが、印象派の両巨匠であり、友人であったモネとルノワールの二人がイーゼル（画架）を並べて描いた『ラ・グルヌイエール』。

舟遊びをしたり、軽い食事を楽しんだりする遊園地であったこの地でモネとルノワールは一夏を過ごし制作しました。

ラ・グルヌイエールの中央には「植木鉢：カマンベール」と愛称された人工の島があり、この島に集う人々が描かれています。

ルノワールの『ラ・グルヌイエール』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Auguste_Renoir_-_La_Grenouill%C3%A9re_-_Google_Art_Project.jpg

1869年 | 油彩、キャンバス、66.5 × 81 cm | スウェーデン国立美術館

モネはセーヌ川の水面に反射する光や風をどのように描き出すかに熱中し、ルノワールは白いドレスやピンクのドレスの女性など人物の描写に重きを置いていたのでしょうか。

そこからは、同じ印象派ではありますがモネは風景画家、ルノワールは人物画家といえます。

ちなみに「ラ・グルヌイエール」は「蛙の棲み処」という意味です。

俳句では「蛙」を詠んだ句を取りあげます。

青蛙おのれもペンキぬりたてか

芥川龍之介(あくたがわ りゅうのすけ) (1892-1927)

<季語> 青蛙で三夏

青蛙は木の枝や葉の上にとまっている小さな蛙。

そのみずみずしい緑を塗りたてのペンキにたとえています。

この句はフランスの小説家ジュール・ルナール(1864-1910)の『博物誌』にある「青いとかげーペンキ塗りたて、ご用心！」に着想を得た本歌取り手法を用いています。

私も詠んでみました。

手をつきてかわいい福助あおがえる

白井芳雄

今回は「ピエール＝オーギュスト・ルノワール、その絵画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：『現代世界美術全集 4 ルノワール』(集英社)(1970年)
1371-536004-3041

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社)
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』(角川学芸出版)
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621034-6 C0392

白井明大・有賀一広
『日本の七十二候を楽しむー旧暦のある暮らしー』(東邦出版)
ISBN978-4-8094-1011-6 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com